

中国「うるし」の旅—長沙へ—

高橋隆博

今年の8月下旬から9月上旬にかけて江蘇省と湖南省を訪れた。本年春から夏にかけて万博公園エキスポランドで開催された「中国長沙馬王堆漢墓展」が旅行の直接のきっかけとなった。1972年、湖南省長沙市の東郊外で発見された馬王堆漢墓は、「今世紀最大の発見」と評され、世界中の耳目を驚ろかせたことは今さらながらに記憶にあざやかである。その発見以来、海外で初めて開かれたのが今回の展覧会であった。

私達は梅雨に入ったある日会場に向いた。私達とは「漆の会」のメンバーのことである。4年ほど前から、中国漆芸技術のバイブルともいうべき、明代の『髹飾録』を読んでいる。漆芸作家、文化財や仏像の保存処理と修覆に関わっている者、大学・研究機関に籍を置く者と多彩な一言居士ばかりで、それだけに思いもかけない意見が飛びかうことになる。ただ大方は、中国古典籍に門外漢なので、こちらの方は、もっぱらその方面の専門家の奈良女子大学松尾良樹助教授にすっかり頼り切ってしまっている。煩いの全てを背負い込んでの松尾さんは、好き勝手に放言する私達に切歯扼腕しているにちがいないのである。もっとも、研究会後の酒席につられて寄り集まっている会ではある。

展覧会では、湖南省博物館副館長傅學有、同省文物事業管理局文物科長胡樹旗の両氏のご案内をいただき、答礼として、その夜ささやかな酒宴を開いた。いつの日にか意見交換会を持ちたいものだということが、その晩の懸案となっ

た。その後、帰国した両氏と連絡を取り合うなかで、湖南省文化庁並びに同省人民政府から「中国漆工芸及文物保護国際学術討論会」への招請状が届けられたのは8月上旬であった。

開会前に、上海、蘇州、南京の主だった博物館、遺跡、寺院などを見学した。新石器時代から現代までの質量共に圧倒的な、就中匠卷たる青銅器群の上海市博物館に驚嘆して、次に訪ねたのが蘇州博物館。目的はただ1つ、1978年蘇州市瑞光寺塔第三層塔心窰穴から発見された黒漆螺鈿経箱にある。螺鈿が唐代に盛行したことは、『安祿山事迹』や我国正倉院の20例ほどの螺鈿器のほとんどが唐代のそれなのであるから、今さら強調するまでもない。ところが、肝心の中国においての唐代遺物は極めて少ない。伝世品はいうにおよぼず、出土品も河南省洛陽澗河西16工区、同省三門峡市区、陝西省咸陽陽泉平の各唐墓出土の三例の螺鈿鏡を数えるにすぎない。宋代では、方勺著『泊宅編』に「螺鈿器本出倭国物象百態頗極工巧」とあるように、日本に源流があると認識されていたほど低調であった。唐代にあれば盛行していたにかかわらずにである。

さて、瑞光寺塔の黒漆螺鈿経箱は、塔の建立（北宋）と経巻の年代とを勘案して、10世紀後半から11世紀前半と考えられている。しかし、花鳥文や連珠文の意匠、毛彫螺鈿と平文（平脱）などの技法、いずれも唐朝のそれを踏襲している。いな唐代に置いてもよさそうに思うほどである。とすれば、宋代に螺鈿器が衰退したとするのは、また唐代に漆地螺鈿が行われなかった



馬王堆木槨



蘇州瑞光寺塔出土黒漆螺鈿経箱

とするのは改めなければならない。因みにさきの出土螺鈿鏡も漆地ではない。ともあれ、唐・宋の両代における螺鈿技法をうかがうに、極めて示唆的かつ重要な立場にある経箱なのである。状態が良好でないということで、複製品（福州で製作）が陳列されていた。

南京博物院では、良渚文化（漆塗陶器）から清代までのほぼ80点の漆器を仔細に拝見し、さらには館員の方々とは終日交流を持ったことは有意義であった。また、南京東北郊外、南北朝・梁墓の辟邪（石造有翼獅子像）も忘れ難い。有翼文はスキタイ文化を本源とし、その影響のもと、中国では戦国時代に出現し漢代ことに後漢に流行した。辟邪の有翼は陽刻と陰刻の二種があった。陽刻が陰刻に先駆けるものと考えていたのだが、陰刻有翼辟邪の方が、その量感において、デッサンの初発性においてすぐれている。つまり、写実的な動物文をその美術的特徴とするスキタイ文化に近いのである。今後の宿題となった。ふと百済武寧王陵出土の鎮墓獸（高30、長47m）が有翼一角獣だったことを思い出した。これは明らかに梁の影響である。武寧王は梁の武帝に朝貢使を遣し、武帝から寧東大將軍に除されているのである。『梁書』の「百済伝」の記するところである。

南京で機上の人となり、暫らく長江を眼下にする。窓に顔を押し当て、これが廬山、鄱陽湖、あれが洞庭湖と想いを馳せて飽かず眺めた。2時間ほどで長沙空港に着陸。石の一個だにまじってはいそがない赤茶色の大地が印象的。周囲には何もなく見はるかす大平原。東に武夷、南に南嶺の山なみがかすかに見えている。空港には、さきの両氏と湖南省文物事業管理局弁公室副主任王沅沅女史が出迎えてくれた。長沙の夜を芙蓉賓館に投じる。



梁墓の辟邪

翌日、湖南省博物館、高至喜館長を表敬訪問。歓談後、馬王堆出土漆器と漢代漆器を拝見。そして、博物館と馬王堆漢墓出土文物陳列館、さらには馬王堆遺跡を見学する。

次の日、「中国漆工芸及文物保護国際学術討論会」が博物館で開かれた。湖南省文化庁長官、同省文物局々長をはじめ、同省の文物行政、管理、研究機関の主だった人たちが列席された。討論会の発表者は次の通りである。

『髹飾録』について 奈良女子大学松尾良樹

「中国・日本・朝鮮の螺鈿」 関西大学高橋隆博

「正倉院の漆芸」 正倉院事務所木村法光

「漆使用の起源」 奈良国立文化財研究所工楽善通

「リンデン民族博物館蔵中国古代漆器」 漆芸作家北村昭斉

「出土漆器の化学分析」 京都市埋蔵文化財研究所岡田文男

中国側

「漢代漆器芸術」 湖南省博物館美術工作部部长李正光

「漆木器溶剤脱水法探究」 湖南省博物館技術部副主任魏象

以上で、終日にわたっての質疑応答があった。

夕刻におよび、当地出身のかつての指導者故毛沢東が長沙に帰郷した時、必ず立ち寄ったという、「火宮殿」で湖南省文化庁、同文物管理局、同博物館主催の晩さん会が盛大に催された。ホテルへの帰路を全く記憶していないのですっかり酩酊してしまったらしい。

私の中国漆芸の旅は、今ようやくはじまったばかりである。今回の中国側が示されたご厚情に感謝する以外にない。この友情を今後の研究にいかしていきたいものである。



馬王堆出土漆耳環（部分）